

とも歩む ⑮

滝脇 憲

先日、ある利用者を囲んで軽食会が行われた。とび職として、長年、東京・山谷で働いてきた80歳代のWさんだ。認知症が進行し、アパートでの一人暮らしが難しくなっており、しばらく前

に、私たち「ふるさと会」が借り上げている元簡易宿泊所に引っ越してきた。そのWさんが、最近、ご飯を食べなくなってしまう

「大丈夫？」と声をかけているという。どうやら、周りの人が食べているのを見て、食べ始めることがあるらしい。だったら、好物の

「寅さんの茶の間」で支え合い

た。同じ建物で暮らす人たちと話し合った。一回り年下のTさんは「本人が一番つらいんじゃない」と気遣う。Kさんは「いつも寄り添い、

お稲荷さんをみんなで作り、食事をやろう」ということになった。当日は、山谷の商店街にある「ふるさと会」の寄り

合い所「共同リビング」に、18人が集まった。Wさんと面識のない利用者や、訪問看護師、ヘルパーさんも来てくれた。「みんな見てるから心配せんでええ」「夏を元気に乗り切って」。温かい励ましの言葉が相次ぎ、Wさんはお稲荷さんは何個も食べてくれた。

連絡の取れる家族はいないが、Wさんは孤独ではない。ここには情の世界の付き合いがある。私たちがイメージするのは、映画「男はつらいよ」の寅さん一家の茶の間だ。時にはケンカしながらでも、お互いホッとできる関係がある。血縁はなくても、家族的な関係を作り、支え合える。人間関係づくりのお手伝いこそが、「生活支援」の本質であり、私たちの仕事なのだ。

◇ 43歳。NPO法人「自立支援センターふるさと会」理事。

* 6人によるリレーコラムです。